

令和 4 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (5) 地域への文化発信の拠点となる取り組み

申請組織 An die Musik 実行委員会 (教育学部)

申請組織長 役職名 学部長 氏名 竹内 聖彦

統括責任者 役職名 教授 氏名 宮田 俊雄

課題名 卒業生と教員によるコンサート ～音楽に寄せて～

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	宮田俊雄	教育学部・教授	企画運営、ピアノ演奏
	分担者	池田京子	教育学部・特任教授	合唱指揮
		渡辺 康	教育学部・准教授	作曲
		富久田 治彦	教育学部・非常勤講師	フルート演奏
		田中ゆりあ	教育学部・非常勤講師	ピアノ演奏
	稲垣 祐馬	名古屋芸術大学・非常勤講師	マリンバ演奏	

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200字～300字程度で記述)

平成21年第1回相山女学園大学教育学部室内楽演奏会「連弾からアンサンブルへ」を開催した。以来、毎年演奏会を行い、第3回目より教員のほかに第1期卒業生が参加し「卒業生と教員によるコンサート」として開催している。今回は13回目となり、第2期、10期、11期卒業生が演奏に参加した。卒業生が次世代への教育を継続していく上で、卒業後支援となる目的で発足し、音楽を愛する気持ちを育むことができることは、違いを超えて共に生きる協調性を育むことができる。そのために教員は高い技術と音楽性が必要であるが、現場の教員として働く上で技術の維持が難しくなる。また教員が学生の尊敬を集め音楽教員への道を志すきっかけを作るためにも、卒業生と教員が同じ舞台上立って演奏発表を行う意義があると考えられる。

2. 事業方法 (特色・独創性) 等 (300字程度で記述)

卒業生、在学生在が教員とともに演奏し、技術と表現の幅を越えてひとつの演奏会を作り上げる。従来の大学教育では卒業までを考えるが、卒業生への支援、技量維持については感心が薄いのではない。教員への志望動機は自分が指導を受けた教員の影響が非常に大きい。本活動は、大学教員の演奏技術の向上のみならず、卒業生の演奏及び指導技術の向上を意図している点では画期的な意味を持つ。卒業生の発表の場は、生徒、父兄など社会的な広がり生まれ、また同窓生たちの連携の場となる。在学生在も教員と共に舞台参加することは、学校教育の場から外に踏み出すことにより、生きた音楽体験の場となり真剣に考えるきっかけとなる。本学では実技面などに自信がない学生もいるが、少人数教育を生かしそれぞれの独自性を伸ばすことができる。合唱やアンサンブルの経験は互いに協調し、ひとつになって伝えることにより、音楽の楽しみを分かち合い人々との関係を築く人間性を育む力にもつながる。

3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

2022年12月18日(日) 中区伏見 電気文化会館 コンサートホールにて午後2時開演、午後4時終演

椋山女学園大学教育学部 卒業生と教員によるコンサート ～An die Musik～ 音楽に寄せて

入場者数 170名 (整理券165名、招待券5名)

第1部

卒業生6名(第2、10、11期生)によるピアノ独奏、ピアノ連弾、室内楽
教育学部3年生18名による合唱 指揮・池田京子(教育学部特命教授)

第2部

ピアノ独奏 宮田俊雄 (教育学部・教授)
作曲作品発表 渡邊 康 (教育学部・准教授)
マリンバ演奏 稲垣 祐馬 (名古屋芸術大学・非常勤講師)
フルート独奏 富久田 治彦 (教育学部・非常勤講師)
ピアノ伴奏 田中ゆりあ (教育学部・非常勤講師)

一般の多く聴衆に支援されることは、椋山女学園の地域文化への発信として重要なことであると考えられる。6人の第2期から第11期卒業生による演奏は教職に就き練習時間の余裕も少ないながら努力し、表現したい気持ちが伝わる共感が持てる演奏であった。今回は特に、ヴァイオリン、クラリネット、ピアノによる室内楽演奏は初めてのことであり、音楽コースの学生の幅の広さとレベルの高さを示した。

教員による演奏は、ピアノ独奏、作曲作品発表の電子音とマリンバの演奏、最後にフルートとピアノのアンサンブルでは、圧倒的な演奏技術と音楽表現で聴衆を魅了した。

4. キーワード (本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載)

①卒業後支援	②教員の質向上	③音楽文化活動	④生涯学習
⑤アウトリーチ活動	⑥情操教育	⑦同窓会活動	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。)

昨年はコロナ禍によりやむなく多くの演奏会は中止となったが、今回も開催できたことは大変にありがたいことであった。感染対策を徹底し、一般の入場者を客席数の半数に制限し行った。演奏会への感想では、卒業生と教員が共に作る舞台に対し、卒業後も音楽を続けている姿に感銘したこと、また初めて音楽ホールにて鑑賞をした学生も多く、響きの臨場感や生の音の美しさに触れたことへの感動もあった。音楽を愛好する聴衆を幅広く育んでいくことも大事であると考えられる。

今後、次回の演奏会に向けて卒業生の希望者の選択、教員演奏の充実化など、これまでの課題、反省を踏まえて、企画運営やプログラミングなどを考えたい。秋の音楽会シーズンでは土曜、日曜のホールの確保が難しく、また開催時期を決めることも課題である。より内容の充実したものとなるよう取り組んでいきたい。